

小作争議の中の子ども像

— 蜂須賀雨竜ピオニール覚え書き —

増 山 均

はじめに

ピオニール、あるいは労農少年団とよばれる子どもの組織が、大正末から昭和初年にかけての農民運動・労働運動の高揚の中で、全国的規模で展開されたことは、戦後の教育史研究によって少しずつ明らかにされてきた。

しかし、全国に散在する個々のピオニールの歴史と内容については、まだほとんど明らかにされてはいない。

地主制度の下で、言語を絶する貧困の打開をめざして決起した農民の小作争議を契機に生み出され、労農階級の解放運動の高まりとともに全国的にひろがったこの運動は、その出発と同時に天皇制支配権力の苛酷な弾圧にさらされつづけた。そのため、当時のとりくみの具体的内容を記した書類は、あるものは印刷と同時に官憲に没収され、またあるものは運動と組織の防衛上、当事者の手で処理され、今日ほとんどわれわれの目にふれる機会はない。

しかし、戦後、運動当事者の証言を頼りに、散逸した史料の収集と整理がすすめられ、ピオニール運動と関係の深かった労農大衆団体の機関誌紙の復刻が、近年になってようやく実現しつつある。1975年に復刻された『新興教育』（新興教育復刻版刊行委員会編・白石書店）や、その中に収録された『ピオニールトクホン』『ピオニールの友』『全農ピオニール夏季教程』、あるいは1977年復刻された『少年戦旗』（戦旗復刻版刊行会）などは、まだ発掘しえない欠号を含んではいるもののピオニール研究の上で不可欠の貴重な資料である。ところが、これらはすべて労農団

体の中央機関誌や資料であって、各地の運動のなまの資料は、未だほとんど失われた状態におかれているのである。戦前のピオニール運動の歴史と内容をトータルに明らかにするためには、すでに発見された資料を手がかりにしつつ、さらに個々のピオニールのなまの資料の発掘をすすめるとともに、運動当事者の証言を記録する基礎作業が欠かせないであろう。

筆者は、すでに当事者入手した資料とそれまでの先行研究を検討することを通じて、戦前日本のピオニール運動の歴史的全体像を明らかにし、北は北海道、南は沖縄まで全国に100を越えるピオニールが組織されていたことをつきとめて整理してきた。⁽¹⁾ また日本で最初に目的意識的に組織されたピオニールである豊里労農少年団（宮城県）をはじめ、何ヶ所かのピオニールについての発掘調査もすすめてきた。⁽²⁾ そしてその中で、組織だった運動としては約5カ年という短期間であったけれども、ピオニール運動の体験が地域の民主主義的な伝統の1つとして今なお息づいていることを知り、この運動の歴史をより包括的に、より体系的に整理しなければならないと痛感させられたのである。しかも、戦前のピオニール運動の高揚時から約半世紀、当時指導者として活躍された人々が、次々に逝去される不幸に直面している時だけに、以上の作業は戦前の教育史研究にとって緊急を要する課題なのである。

ここでは、昭和初期のピオニールを発掘し、その実態を明らかにする基礎作業の1つとして、北海道の蜂須賀雨竜ピオニールに関する資料を整理し、今後の現地調査への覚え書きをまとめておこうと思う。

1 蜂須賀小作争議と子どもたち

1930(昭和5)年5月号の『少年戦旗』には、「父母に勝たせたい此の争議」と題して同盟休校中の蜂須賀争議団少年部から届いた子どもたちの作文が掲載されている。その1つ、尋常小学校6年の女の子は次のように書いている。

尋 6 ××××子

私は兄さんが今日から学校を休まねばならぬと云った時、私は休みたくなかった。それでもよくよくかんがへて見ると夏のあつい日お父さんやお母さんが汗を流して働いて作った米を地主がみんなしほり取ってしまふ。それだから小作人は金がないのです。ほんとうにお母さんやお父さんが田や畠からかへって来て学用品を買ふ金を与える時其の金を見ると汗がいっぱいいてゐます。地主は遊んで居てもますます金もちになり小作人は働いてもますますびんぼうだ。それでも年貢をまけようとしません。

兄による突然の同盟休校の指示にとまどいを感じながらも、日常の父母の生活を通してつかんでいる貧乏の原因を卒直に表現したこの作文は、どのような斗いの中で書かれたのであろうか。多くの場合、労農団体の中央機関誌紙に掲載された一篇の子どもの作文だけでは、当時のピオニール活動とその中での子どもたちの生活と意識について正確にとらえることはむずかしい。しかし、この作文に関しては、現存する当時の蜂須賀争議団の「争議ニュース」や「争議日報」によって、さらには、争議当事者への聞きとりの記録によってかなり明らかにすることができる。

1978年に出版された『小作争議のなかの女たち』(高橋三枝子著・ドメス出版)という1冊の記録がある。この書は著者が、蜂須賀農場での小作争議を聞いてぬいた女たちの貴重な証言をたんねんに

まとめ上げたものであるが、その中にさきの作文を書いた当人である岩松ため子さんと家族の斗いの日々が登場してくる。この貴重な記録に収められた証言と、当時の争議資料を重ねあわせながら蜂須賀雨竜ピオニールの歴史と実態、その中での子どもたちの活動と意識について明らかにしていきたい。

蜂須賀ピオニールの舞台となった、蜂須賀農場とそこでの小作争議について、まず、かんたんにふれておこう。⁽³⁾

空知管内きっての米どころといわれる雨竜町は、その昔人を寄せつけない最果ての原始林と原野の地であった。しかし明治20年代、有産華族による北方新開地への投資の中で、この地が蜂須賀茂韶侯爵に所有され開拓された。蜂須賀は、この地にかつての藩領地であった阿波、淡路から小作人を募集して送りこみ開拓させた。最初この地の開拓に当って集団管理方式によるロシア式の大農場の導入が試みられたが、大樹林地帯の開墾は想像以上の困難をきわめ、さらには日清戦争による労働者不足も加わって、1897(明治30)年より小作農経営に切り替えていく。

北海道開拓地におけるこの小作農経営は、生活困窮農民に目をつけ仕度金を貸しつけて移住させ、小作地をあてがい、自立経営の可能性をみせかけることにより、必死の開墾と労働にかきたてる仕組みになっていた。土地所有者は、東京から管理人を派遣して、自らの手をいっさい汚すことなく搾取と収奪によって渾大な利益をあげ、小作人は、厳しい大自然を相手に言語に絶する苦闘をしても、結局は小作料の納入に苦しみ、加算されていく借金の返済に追われつづけた。

鎌一つで大草原を刈りすすみ、鍬一つで原野を耕し、斧一本で原始林をきり拓く。入拓者は、雨風をしのぐだけの貧相な小屋に寝て、親も子も働きつづけた。苦難の中を生きてきた女たちは、
「朝の3時いうたらあらかたひと仕事すったも

んだ。暗がるから暗がるまで働いとって、食うもんもろくに穫れなかったがだ。子どもらにはいつもへすないおもいをさせとった。空き腹抱えさせて、白米めすが食えるとはおもっとらなんだが、せめていもでもかぼちゃでも腹いっぱい食べさせてやりたいとおもっても、それさえ出来ないで情けなかったさ⁽⁴⁾と当時を回想している。農作の年でも小作料を納め借金を返すと、あとには米は残らなかったという。

働けど働けど楽にはならない暮らしの中で、次第に入植農民の不満はつものっていく。蜂須賀農場では、農民の不満を緩和する方策として、農場名を「侯爵蜂須賀農場」と改め、小作人に“御農場”と呼ばせて他の農場に対する優越感をもたせるとともに、小作人の“表彰”を行って不満をそらして恩恵意識と忠誠心を育て生産意欲を高めようとしてきた。しかし、大正時代に入ると、うちつづく冷害による疲弊と「土地調査」を口実とする小作料の値上げに対して、ついに1920(大正9)年に、最初の小作争議が起こる。

この争議を皮切りにして、蜂須賀農場での小作争議は、昭和初年にかけて毎年の様に繰り返される。特に1926(大正15)年2月、日本農民組合雨竜支部が結成されてからは、全国的な運動と結びついて本格的な農民運動が組織的に展開され、小作料をめぐる争議が1933(昭和8)年まで毎年連続して斗われている。その中でも、子どもたちを直接巻きこんだ激しい斗いは、1930(昭和5)年と1932(昭和7)年の争議であり、争議団の指導のもとに子どもたちの同盟休校の戦術がとられ、この時盟休中の子どもたちを対象にしてピオニールが組織されたのであった。

2 蜂須賀雨竜ピオニールの組織と活動

(1) ピオニールの結成

1930(昭和5)年3月、ピオニールの結成に至るこの年の争議は、前年11月、組合員35

名が小作料6割減等を内容とする「嘆願書」を提出し、地主側がそれを拒絶したことに端を発している。12月には、組合側は370人を集めて農民大会を開いて交渉をつづけたが、地主側は依然拒絶。そしてこの年の1月、組合は全農北聯(全国農民組合北海道聯合会)の活発な応援を受けて、大量のピラを配布。2月地主側は、訴訟を提起して、争議に加っている。農民たちの動産の仮差押を執行するに至り、ますます両者の対立はエスカレートしていった。同2月には争議団に「青年部」が結成され、3月には、組合の主婦たちの手で「女房団」が結成され、女たちが農場事務所に押しかける。要求は、学芸会を前にして子どもたちは着るものがない。差押えた箆笥や衣類を返せということである。当時の「動産差押物件目録」によれば⁽⁵⁾玄米、モチ米、エンバク、豚、米びつ、箆笥、障子、時計、マサカリ、雑木薪、馬糞、衣類、白木戸、仏だん、たたみ、びようぶなど、まさに手当たり次第身ぐるみはがれた状態であった。

女房団は、女の気持、母親の気持は女でしかわかるまいと、石立管理人宅の妻女に会いに出かけたのであるが、その結果は、冷たく面会を拒否されたばかりか、地主側が雇っている暴力団により暴行を受け、はては「住宅侵入罪」で11名も検挙されてしまった。その中には当時すでに60才の高齢だった西尾きみさんも含まれている。

地主側のこうした残虐非道なやり方に抗義して、ついに組合側は、学芸会を目前にひかえた子どもたちの同盟休校を決定し、世論に訴えたのである。当時の生々しい状況を、3月9日全農北聯臨時雨出張所発行のピラ「雨竜争議ニュース」1号は、次の様に伝えている。

結合員を先頭に盟休した児童・女房・青年
の一大デモ農場事務所へ殺倒!

アワをくった管理人・官犬!

弾圧糞喰へ!

昨日からのモノモノしい官犬の大衆動員をし

たコケオドシも、ものかは吾等の戦闘的争議
団員は一步もヒルム事なく農場事務所目かけ
て確雪を蹴った。

官犬が警戒しているから押かけることが来
ないようでは争議が出来るかとガンバってい
た女房団は又全部子供の通学を休ませて盟休
した児童と一諸にオヤジさん達のアトを追っ
た。

今日のデモには奴等に指一本サゝしてはな
らぬと青年部は全部デモの警備に動員された。
此の外俺達も一諸戦ふゾと土地解放反対派の
小作人10数名が押しかけ、団員30名女房
団30名盟休児童30名青年警備隊10余名
と同情者とを加へた100余名の大デモには
ササガの管理人も官犬と共に完全にフルエ上
って仕舞った。……

少年団結成へ！ 青年部の活躍

8日のデモには同盟休校させて地主のキモを
寒からしめた。ブルジョワ教育で子供達の純
真な気持をヨゴしておいてはならぬと少年団
結成のため、9日佐々木君宅へ40数名の小
学児童をアツめた。

争議を起している理由

地主と裁判所・警察のウチマク、

争議団歌等を話コンで散会したが、目玉を
クリクリさせて俺達も争議をヤルンダ！と
大元気だ！

こうして、3月9日に少年団が結成する。翌10
日付の「争議日報」第1号には、「おれたちの子
供のスパラシイ元気！ アクマデ要求貫徹に死力
をツクセ 昨日の少年少女の第1回の会合！」と
して、当日青年部の指導で、①争議についての説
明、②争議団歌の練習、③争議についての作文を
書いたことが記されている。当日書かれた子ども
たちの作文は、この日報に載せられて「子供でさ
へこんなに元気なんだ！ どうしておれたちはヲ

メヲメ争議をマケテンマヘヨウカ！ 断じて勝た
ねばならないゾ！」と親たちの志気を鼓舞すると
ともに、組合を通じて東京に届けられた。さきの
『少年戦旗』5月号に掲載されて全国に知らされ
た蜂須賀ピオニールの子供もたちの作文は、親た
ちとともに闘うこうした争議のまっただ中で書か
れたものであった。

(2) 組合による指導とピオニールの活動

同盟休校に際して組織されたピオニールは組合
によりどのような指導を受け、どんな活動をした
のだろうか。ここでは、1930(昭和5)年と、
32(昭和7)年の同盟休校中の活動に注目しな
がら、その様子を見てみることにしよう。

まず第1にあげねばならないのは、争議団の援
助によって「農民学校」が用意されたことである。
学校といっても、組合員の納屋を借り、青年部員
と年長の子どもが先生をつとめ、争議についての理
解を深める話とともに学校の勉強の補習が行われ
た。農民学校の開始を、当時の「争議日報」(30
年3月14日付)は次の様に報じている。

農民学校に集ふ吾等の児童！

40名の少年少女 少年団歌を高唱して！

今日からイヨイヨ盟休だ！

明日は学芸会だ！

可愛い子供達に晴着をキセたいが昨日の交渉で
女房団は恨の涙をのまされ今卒業式を前にして
学用品を買ふことすら困ナンになって如何に子
供が可愛いくともどうして学校へ通はせておけ
やうか、涙ながらに最後の決意断然今日から盟
休だ、親の涙をよそに子供達は益々元気で吾等
の学校に集った。地主への憎しみを復一杯に「モ
シモン石立」を唱って授業に入る。

先生は青年部の諸君！ ヨシ来た、子供達の教
育は立派に俺達が引き受けたと、今日から可愛
い子供と一諸に戦うのだ！

農民学校に集った子どもたち38名は実に整然

と授業をつづけたという。子供たちの指導に当たったのは、青年部の前川健太郎さんと佐々木新之丞さん、そして当時雨竜小学校女子補習科2年の前川初子さんである。「そのときの初子さんの授業振りが見ごとだった、とのちのちまでの語り草になっている」⁽⁶⁾といわれる。しかも農民学校で先生役をつとめた前川兄妹は、雨竜小学校で群を抜く成績と人柄で定評があり、卒業式で祝辞や答辞を読むのは決して前川兄妹だったというほどである。しかし「それほど衆目が認める前川兄妹も争議のある年は例外だった。優等賞はむろん、総代に出ることも答辞をのべることも、いったんは決っても、当日になると降された」⁽⁷⁾という。中には正義感の強い担任の先生がいて校長や教頭に真剣に抗議し応援してくれたが、最後は厳として拒否されるのが常だった。

前川兄妹たちは、学校でこうした差別を受けることにより、一層社会の矛盾を見ぬくとともに、争議に直接参加する中で不合理や不正義に対して敢然と闘っている父母の姿を通して農民組合の運動に尊敬と確信を持ったのであった。当時、前川初子さんが書いた作文も『少年戦旗』に載っていて、今でもそのけなげな決意が読者の胸をうつ。

女子補 ×××子

明日はいよいよ学芸会。西の山に入らんとする夕日が強く地上を照らす時私は一人すみなれた母校の門を出た。明けはなされた教室の中からは賑やかな友達の談笑する声が流れるけれど、私の胸には明日の学芸会着を解いて貰ひに行った母達の事を思ひ出してゐた。農場の人が聞いてくれたであろうか、それとも駄目だと云っただろうか。いろいろ考へてゐる内に早や我家の前へ来た。と急に家の中から妹がとび出して来た。「大問題がおこったよ」とせわしそりに云った。しゅんかん私の胸にはすべての楽が一時になくなったやうな気がした。さうして妹の口から今日の母達の交渉の結果、暴力団を使って

うでづくで母達を追かへしたのを聞いた時、私はみても立っても居られないやうな腹立たしさをどうする事も出来なかった。そうだ。私はどうなってもどんなつらい事も又友達から受けた冷笑の言葉も忍ぶのだ。さうして無じひな畜生のやうな農場と戦ふのだ。健な父母を出来るだけなぐさめはげますのだ。私達の勝利は全村民を幸福にする事だ。みんなといっしょに、此のうすぐらい納屋の争議団の学校で学ぶことは、南向きの地主学校の教室よりも力ある希望に満ちてゐるのです。

ピオニールの子供たちは、農民学校で学んでいただけではない。組合のピラマキやニュースの配布などの仕事を分担して、集団的に取り組むとともに、「少年行商隊」を組織して豆売りに出かけたり、デモの応援に出かけ、争議の中で重要な斗いの一翼を担っていた。

子どもたちは、組合の闘争の中で大人にはできない活躍の場面がいくつもあった。官憲の監視がきびしくてオルグが組合の幹部とうまく連絡をとれない時などは、ピオニールの子どもたちが遊びながら組合員の家々をまわり、必要な連絡事項を伝えあるく。争議の中で組織された子どもたちは、まさに頼りがいのある“小さな同志”として位置づけられ、親たちの志を受けついで農民運動を進め、小作農民の解放をめざす“小さな闘士”として育てられたのである。

“小さな同志”“小さな闘士”を育てるために、青年たちや婦人たちは、その方法を手さぐりで工夫した。1932(昭和7)年3月28日付の「青少年ニュース」には、村の娘たちが「娘は娘でガンバロウ」と「娘の会合を持って研究会をやり子供の指導をどうすればよいかと云ふ事を具体的に研究をし」ている様子を書かれ、「セイネンノシドウノモトニガッチリトノウミンガツコウヲマモツテ……『オイラノウデデモムスベバツヨイトセンセイノイウコトニミミラソバダテ……シヨ

ウネンジシンノシブチヨウフクシブチ。ウラキメ…
…マイニチゴゼンクジカラシヨウゴマデゴネンイ
ジ。ウアツマルノダ」とピオニールの元気な様子が
報じられている。

青年たちは、次の様な「小供の斗争歌」をつくり
子どもたちに教えていた。そこには“小さな同志”
に伝えようとする農民組合の親たちの思いと、
子どもたちの課題が端的に表現されている。1932
(昭和7)年2月1日付の「争議ニュース」に書
かれたこの歌は、のちに「貧農少年団歌」の名で
『ピオニールトクホン』第2輯(新興教育研究所)
に収録され、全国のピオニールむけの教材とされ
たのである。

1. おいらのウデでも むすべは強い
うらみの地主を たほすは今ぞ
いざや あつまれ どうしよむすべ
おいらは貧農少年団
2. かさなる争議で きたえたおいら
地主にデモれば だれより強い
ピラマキ レポータ ニュースもくばる
おいらは貧農少年団
3. おいらの赤はた うちふるかげに
にくしみふかく うらみはつもる
鬼の 地主を たほさでおこうか
おいらは貧農少年団
4. すゝむおいらの 赤旗をみよ
やがておいらの 時代がくるぞ
いざや あつまれ どうしよむすべ
おいらは貧農少年団⁽⁸⁾

3 ピオニールたちの精神史

こうした斗いの中で、子どもたちはどのような
意識をもち、どのように育っていったのか。親た
ち、青年たちの働きかけと、自らの生活体験の中
で争議の意味をつかみ、多くの子どもたちは、せ
いはいっぱい親たちの斗いの中に入ろうと努力して
いたことは確かである。当時書かれた子どもたち
の一つ一つの作文にその気持がにじみ出ている。

尋五 ×前 ××子

争議が大きくなったら私達は学校をやすんで
みんな一しょに、お父さん方や青年の人のいふ
ことをきいて、それから又青年たちがびらまき
や、又はタスキをしてシナモノうりをしなければ
ならないと思っております。又青年たちがどこえ
でもつかいに行けとゆはれたらすぐゆこうと思
っております。私達は私たちどうしてほかの人にま
けないやうに一しょけんめいのうみくみあいの
学校にかよってペンキやうをしようと思っております。⁽⁹⁾

しかし、こうして積極的に斗いに参加しようと
する決意と同時に、次の作文に率直に記されたよ
うな気持をどの子どももっていたことも確である。

尋六 大窪ハツエ

朝はいつの朝でも、学校へ行きたいとおもわ
ない事はありません。朝、納屋の学校へくる時
私の友だちに会いました。友だちに、あんたど
こへ行くといわれる時、私はしかたなく、ちょ
っとそこへ行ってくるといって通りぬけました。

友だちは、あの人は、百姓の学校へ行くのだ
と話をしていました。私もあの人たちのように、
あっちの学校へ行きたくなりました。

初めの時は、父さんから、お前は今日学校を
休んで農場へ行くのだといった時私はほんとう
に泣きました。

私は学校へ行きたいとおもいますが、この解
決のつくまでは、決して行きません。卒業式に
も行かれるか、どうか分かりません。早く学校に
ゆくようにして下さい。⁽¹⁰⁾

子どもたちは、日常の生活を通して親たちの苦
労を良く知っていた。だから争議にたち上った親
たちの想いも肌を通してつかむことができたであ
らう。しかし、斗いはきびしい。そのきびしさの
中で、子どもたちは、親の期待にそって生き、同
時に学校の仲間との生活の中でも生きようとして

いた。親たちとともに闘う争議の重い現実、その闘いは学校の中で決して承認されることはなかったが、子どもたちにとっては学校の仲間との生活もまた大切なものであった。

地主と親たちの闘いの矛盾は、子どもたちの生活と意識の中にも矛盾として貫かれた。その矛盾が子どもたちの小さな胸をいためつづけたけれども、彼らの心をきたえたのである。

小林多喜二は、この蜂須賀農場争議の子どもたちの生活を素材にして「健坊の作文」という読み物を書いた。⁽¹⁾ そのストーリーは次のようなものである。

争議団の親たちが、争議に対する社会的関心を高めようとして、子どもたちに書かせた作文を新聞社にとどけたが、掲載されたものは、「仲間のうちでも一番意気地のない、何時でもメソメソしてゐるお芳や直吉」が書いた「一日でも早くこの争議が終つて」とか「一日も早く学校で勉強シタイ」という哀願口調のものばかりであった。親たちといっしょに最後まで闘おうと書いた健坊の作文はボツにされ、とうとう新聞には掲載されなかった。

『少年戦旗』1930（昭和5）年5月号に掲載されているこの短編の読み物は、子どもたちの小さな胸の中でわだかまっている矛盾に注目して、そこからの出口を、親とともに元気に闘う健坊の姿勢の中にこめて示したものであり、そこにはきびしい争議に身をおく親たちの子ども像への期待と願いが示されていたのである。

こうした親たちの強い期待にみちびかれながらも、争議の重みはその中に生き育った子どもたちの精神史にさまざまな屈曲した刻印をとどめているというのが現実の歴史である。

きびしい争議に直面した際の、それぞれの主体の姿勢のあり方が、自らの精神史への争議の意味づけを変える岐路となっているといえるであろう。当時、まだ幼少だったために、争議の意味を理解するに至らず、子ども心にあまりに辛い

思い出としてのみ残り、出来れば思い出したくないという人がいることも確かである。しかし、当時の争議を自らの意志で闘いぬき、非人間的な地主との闘いの中で自らの人間性を鍛えぬき、今なおこの闘いを誇りとしている人が数多く生み出されていることが、この運動における精神史の重要な側面である。そこにこそ、農民組合の指導のもとに闘われた小作争議の歴史的進歩性と倫理性を見ることができると言えよう。

『少年戦旗』に掲載された「女子補」を書いた田中初子（旧姓前川初子）さんは、戦後農地解放の実現の中で“土地は農民へ”のスローガンのもとに闘った自分たちの争議の正当性と進歩性を再認識し、戦前の闘いの体験と誇りを胸に、戦後も一貫して農民生活の向上と地域の革新のために闘いつづけてきたということが証言されている。⁽²⁾ 田中さんの歩みは、小作争議とピオニールの中で育った子どもたちの精神史のひとつの典型であり、その価値をピオニール運動が生み出した教育的価値の中核として、歴史的に高く評価しても誤りではあるまい。

おわりに

私は、かつてわが国最初のピオニールである豊里労農少年団（宮城県）の研究調査の中から、ピオニール組織を生み出し、支えていた力を分析して三つの条件を指摘したが、雨竜ピオニールにおいてもまた、それらの条件が生かされていたことを発見する。

第一は、小作争議に起ち上がった農民たちが、組合に固く団結した闘いを通して村政改革をも志向する中で、将来の生活と生産の担い手としての青年・子どもに自らの志を伝え、立派なあとつぎとして育て上げていくことの必要性を自覚したことである。

雨竜の争議においても、争議団は地主と官憲の弾圧に耐えつつ農民組合に結集し、1933（昭

和8)年の雨竜村村会議員選挙には、元争議団長の前川正治を当選させた。村政に代表を送り出すその背後に結ばれている団結の力こそが、子どもたちを組織し指導する力として働いていたのである。

第二は、青年たちの力である。子どもたちを組織し指導する上で、青年の自覚的なとりくみが不可欠である。子どもたちに年齢的に近い青年は、子どもの気分や要求を敏感にとらえられる世代であり、親たちの願いや志を主体的に受けとめて、子どもたちに伝えていく重要な媒介となる。子どもたちの組織を維持していくために青年たちの援助と指導は不可欠であったが、雨竜でも、村の青年や娘たちが子どもの指導について研究会を開くなど、組合の青年部が果たした役割を見のがすことはできない。

そして第三は、村の婦人たちの役割である。『日本農民運動史』をまとめた青木恵一郎はその著の中で「闘争中における婦人部の役割は決して小さくなく、むしろ婦人部の組織は全体の闘争力を高めるばかりか少年部設置のよき媒介をなしていた」⁽¹³⁾と指摘しているが、雨竜でも「女房団」の結成がピオニールの組織と活動をすすめる上で重要な役割を担っていたといえるであろう。

雨竜村におけるピオニールの組織と活動は、小作争議の激動の中で全国農民組合によって組織された他のピオニールと同様、親たちの争議と運命をともにし、わずか三年の間の途切れがちなとりくみであった。地主制度下の強大な支配力に対する農民たちの斗いは苦難にみちたものであったけれども、その斗いの中で、自らの教育要求を実現しようとした農民たちの努力の足跡は、さらに詳しく発掘され歴史的な光が当てられるべきである。

そして、小作争議をともに闘う“小さな同志”として子どもたちを尊重し、斗いの担い手として育て上げようとした農民たちの子ども観・子育て観は、勤労人民の解放をめざす新しい教育観の萌

芽として、戦前日本の教育史にしっかりと記録されるべき内容であろう。

< 注 >

- (1) 拙稿「昭和初期ピオニール運動の組織と教育」(東京都立大学『人文学報』113号1976年3月)、「子ども組織の民主的伝統」(『教育運動研究』8号、1978年8月)参照のこと。
- (2) 拙稿「昭和初期のピオニール運動(1)~(8)」(少年少女センター『少年少女を育てるために』1975年~77年)参照のこと。
- (3) 雨竜村と争議の歴史については、以下の資料を参考にした。全北海道農民連盟『戦後北海道農民運動史』1968年全北海道農民連盟、五十嵐久弥『農民とともに43年—北海道農民運動私史』1971年5月、労働旬報社、西田美昭「農民闘争の展開と地主制の後退—北海道蜂須賀農場争議の分析」歴史学研究会編『歴史学研究』第343号、1968年12月、青木書店、高橋三枝子『小作争議のなかの女たち—北海道・蜂須賀農場の記録』1978年、ドメス出版
- (4) 高橋前掲書、79~80頁
- (5) 同前 84~86頁
- (6)(7) 同前 53頁
- (8) 復刻版『新興教育』、別巻
- (9) 「争議ニュース」、少年部欄No.1、雨竜争議団少年部係、1932年2月1日付
- (10) 高橋前掲書 125頁
- (11) 『少年戦旗』1930年5月号、9~11頁
- (12) 高橋前掲書、63~64頁
- (13) 青木恵一郎『日本農民運動史』第4巻、1959年、日本評論社版、325頁